

西から東へ (その三)

水野千里

第五日 三月二十八日 快晴

京都、奈良間往復

一、汽車より遅い電報。午前八時頃支關で電報といふ聲がした。これは昨朝鳥取出發前に同地から打電したものだ。それに今朝ヤツト着いたのである。遅れた理由は昨朝一旦配達に來たが留守であつたから持歸へられたのだ。理由はそれとして翌日迄持越すところがあるものだ。

二、上田助教授。吉田、田中里の前の上田助教授の御宅に參り用談を濟せ、同道して京都天文臺に出掛けた。

三、東洋一の天文臺。新らしく出來上つたドームは直徑三十尺あつて、二十時の望遠鏡を据付けられる豫定であつたが、都合によつてその望遠鏡が購入されないことになつたが、幸ひ英吉利で十三時の反射望遠鏡を山本教授の御斡旋で買入れられることになつて、近々此ドームに運ばれ日本一の望遠鏡として活動する日が近いとは喜ばしいことである。このドームからいへば反射望遠鏡ならば四十時位のものに備へ附けなくてはならないのである。近來望遠鏡の口径もメートル法によつて呼ばれて居るさうだが、奈良線の奇遇。午前十一時二十三分京都

發、午後〇時五十九分奈良着の列車に乗込んだききに、余の隣りに座を占めた、紳士と話を始めたところ、九州から山陰線を経て、奈良見物に行くところのこと。九州は何處か尋れた所ら、大牟田の管へ、同地は九州支部の所在で、古賀私吉氏の居らるゝところなので、その事を話すと同氏を知つて居る、「天界」を讀んで居られることは。早速古賀氏へ言傳を依頼した。紳士は坂梨、名は記一。大牟田市出雲町五五の人であつた。

五、奈良女高師西田教授。西田教授は地理科担任で日本天文学會々員である。其處で中等學校に於いて天文事項は何時教授するのが適當であらうかと御意見を伺つた。地理學通論で星界から始めるものと、陸界から始めるものとあるが、一ヶ年間に終るのであるから、餘り甲乙はあるまいとのことであつた。星界を自然地理の最後に教へるのは六ヶ敷からだといふ人がある。さうかと思へば最初に地球の進化から説く方がよいから星界を開巻第一に教ふべきだとの二説があるものである。

六、若草山上の眺望。奈良の地を踏んだのは明治三十一年と大正十二年である。大正十二年には女高師に西田教授を訪れた丈けで行先きを急いだので見物をしなかつた。今度は時間に餘裕があるので、市中を一通り見物することに於いて、正倉院、東大寺、二月堂、三月堂、春日神社、南圓堂、猿澤

の池などに一千餘年の昔を偲んだ。若草山上に登り奈良平野を一眸の下に集め、アイスクリームに渴を癒したときは、此處にも一ヶ小天文臺を設けたならばよいと思つた。

七、山本教授の家庭。御宅は岡崎、西福の川の三六、教授は御承知の京大出身の理學士奥様は高女高等科の御出身と聞いて居る。御夫婦連れて歐米を御遊遊になつたことは、讀者諸君の先刻御承知の事。その間に御子息、進さん、修さんの御兩人は教授の御兩親の許で暮されたのである。ところが昨日からこの新しい住居で親子四人の方々が、再び團樂の樂みを得られたのであるから、御子息達の御喜びは一方でないのである。余が奈良から歸ると尋常三年生の修さんが活動寫眞々々々々といつて居られる。尋常五年生の進さんもニコニコで活動寫眞を待つて居られる。余は何處で活動寫眞が開かれて居るのかなと思つて居たら樂しい夕食後に家庭用活動寫眞機が座敷に運ばれ、チャプリン君の滑稽、那翁戴冠式等次から次へと現はた大喝采の許に開會された。今夜も天文臺に觀測にと思つて居たが生憎雲が厚いのでよして、又々旅行談を承つた。

第六日 三月二十九日 曇、雨

京都から福知山へ

一、大事件。朝食の際先生が大事件があるを申されたので、大阪毎日新聞を見るに昨日

東京天文臺長が、東宮、同妃兩殿下に天文學について進講された報道が掲載されてあつた。東宮殿下には先年御渡英の際にわざ／＼カリニツチ天文臺に鶴駕を進められたことを拜聞して居た。同殿下の各種の方面に御造詣の深き誠に有難い事で、本邦天文学史上に特筆すべき大事件である。

二、創造社書店。同店は一昨年丸太町通りに開業せしもの、店主は余の教へ子の一人であるので、立寄つたら三宅博士の「宇宙」があつたので早速買求めた。同書は三千部を賣り出されてから、著者が重版を好まれぬので絶版となつて居るが、よい本であるから豫て手に入れ度いと思つて居たところ計らずも教へ子の手から余が机上に……………

三、汽車賃の勘定。二條驛で播丹鐵道經由岡山驛迄の切荷を買つたが、汽車賃が高い様なので、汽車中で哩數を出して計算したところさうしても腑に落ちぬところがある。

四、汽車賃に異議がある。福知山驛で汽車賃のことに於いて助役に話したら、京都、谷川間、谷川、加古川間、加古川、岡山間を三段に分ちて計算すること、谷川、岡山間間は私設鐵道で一哩の賃金が五錢貳厘なること。京都、谷川間、加古川、岡山間の賃金は別々になつて遞減法によらないこと等が判明したので、二條驛の計算が至當であることが判つた。

汽車の計算方法について、或る物を知るこゝが出来た。

五、思出深い福知山。福知山に最初に足を踏込んだのは去明治三十二年十一月で、神崎から汽車で、將來の將軍を夢みつゝ、歩兵第二十聯隊に第十三期士官候補生一將校の卵子として入隊し、一ヶ年有餘を過したが不幸其の志を得ずして去つたことがあるが、其の後兩三回この地に來つたことがあるが、同期生土屋中佐が福知山聯隊區司令部に勤務されて居るので久々に面會して昔語りをする爲めに來たのである。夜分は令嬢令息等と一所に廣小路の常設活動寫眞を見物し夜更くる迄話しは盡きなかつた。雲間に時々星が淋しい光りを投げて居た。

第七日 三月三十日 雨、後ち晴

福知山から岡山に歸つた。

一、福知山線。午前九時十一分福知山發、同十時十八分谷川着下車。汽車中で従業員からタブレット、ツユギト、キヤリヤ、受興機などの説明を聽き、急傾斜のところは四十分の一位のさころもあるさか、日本の汽車にはラヂオを備へるのに不便だといふ様な話もきいた。この線路は大阪から舞鶴迄の豫定で、最初阪鶴線といつて、神崎から福知山迄開通されて居たさきに乘つたことがある。其の時分には山陰線が未だなかつた。

二、行李辨當に梅干。午前十一時十七分谷川發の播丹鐵道に乗つて、午後一時三十一分に加古川驛についた。谷川から乗合になつた地方の人々が柳行李を開いて辨當を食べ

始めた。

辨當の副食物は梅干で如何にも山間の氣持ちがしたが、魔法饅から暖から酒が出る、相互の話は東京辯であるのは異な感じがした。

三、播丹鐵道と機動演習。去明治三十三年の機動演習の際に福知山歩兵第二十聯隊は、加古川に沿ふて、姫路に出て岡山迄に第一種演習を行ひ、岡山から津山附近で、第二種演習をすまし播磨を横切つて福知山に歸營したことがあるその時に通つた加古川流域に敷設せられたのが播丹鐵道である。沿線は平々凡々なさころで見るとべきものは一つもなかつた。

四、嬉野も今日は悲しき露營哉。播丹鐵道で社驛を通つた時に思ひ出したことは、この附近に青野ヶ原や、嬉野があつて演習後に露營したことがある。誰れか「嬉野も今日は悲しき露營哉」といつたのも二十餘年の昔となつた。

五、加古川驛陸橋脚に衝突。加古川驛神助役の案内で、高砂行きを汽車に乗らんとして、煙の爲め寸前を見ること能はず、陸橋脚に頭を打ちつけ痛かつた。神さまの陸について行つて居つたので、僅かの負傷ですんだのは不幸中の幸であつた。

六、高砂、尾上の相生の松。加古川驛から汽車で高砂に向ひ、尾上で下車相生の松を見物し、徒歩で高砂に行つて、高砂や……浦船に帆をあげて……の高砂浦や、相生の

松を觀て引返した。

七、上弦の月。窓から眺むる上弦の月は皎々として居た。神氏方で夕食の馳走になつて、午後八時十一分加古川發、同十一時十五分岡山着。直ちに歸宅した。

八、岡山の天。二十五日は山口で雨に濡れ、二十六日は雨の鳥取に着き、二十七日は雨中に汽車を走らせ、二十八日は晴天であつたが夕刻から曇り、二十九日には雨中を冒して福知山で活動見物に出掛け、快晴の夜は一度もなかつたのに、岡山に歸れば快晴六等星迄はハツキリと觀る事が出来る。聞けば二十五日少雨、二十九日雨で二十六、七、八日はよく晴れて居たこと。山陰京都地方に比して岡山附近の天氣のよいことは、一週間の間でさへ右の通りである。

九、岡山天文臺。岡山に一大天文臺を設置したいといふことは、去大正十年から、天文同好會で叫んで居ることである。先年京都天文臺中村要氏が來岡された時にも、京都で四時望遠鏡がなす仕事を、岡山では三時望遠鏡で十分だと云つて居られた。岡山測候所で觀測された天氣日數、三十ヶ年の平均によること一ヶ年間の中、晴天が二百二日四分、晴天で少雨雪、三十日七分、兩方を合して百分率を出すと六十三、八六となつて三分の二は天體を觀測することを得るのである。風穩かなことも内地では其の比尠く、森現測候所長の談によると晝間曇雨天の時も夜分に晴天となること多く且つ霧の如きは一ヶ年中に十二、三回あるの

みで、實に理想的の天文臺の位置であること話された。官公立の天文臺の設置を待たずして、天文同好會で一つ小規模のものを設け誰人でも自由に觀測が出来る様なものにしたのである。而して理想的な新式の大天文臺は官立て、太陽の觀測を主としたものが望ましいのである。

むすび

余は旅行好きである。度々の旅行は大抵豫定の通りを實行して來たのであるが、今度の前後一週間に互る旅行、日數は短かつたが豫想以上に見聞を廣め、到るどころで歡待され、愉快に旅行を續けたことを永く心に銘することを得たのである。(をばり)

通信

久しく御無沙汰いたしました本月二日に當臺北市に参り其後南部を巡り内地では見られぬ珍らしい風物に數々接し愉快な旅行を續けました。

恰度高雄の埠頭を歩いてゐた時です正十二時で港内の汽船は一齊に汽笛をならしました。時の記念日であつたのです。自分の影は全く兩足の下に投じたやうでした。嘉義驛に近い北回歸線標も見ました。昨夕の臺灣日々に見元了氏の談としてこれに關するお話がのせてありました。

「此の標塔は唯々臺灣名所の一つに數へられるのみでなく實に世界唯一の回歸線標として我臺灣の誇りである。これを最初に建設したのは明治四十一年の十月で本島の縦貫鐵道全通の際に夏至線の通過地點を一般公衆に示

さんが爲に建てたのであつた。熱帶温帶の境界とも云へば云へないことはないが氣象の上からは必ずしも此の線を兩帶の境界と見ないからその爲の標塔と云へば云へない方がよいと思ふ。其後暴風の災に遇つて破損したので大正三年に改築し更に大正十三年の春に第三代目の改築となり圖に見る通り堂々たるものである。

太陽は愈々明日はこゝに達し此の標塔を直上から照らすのが午前十一時五十八分過ぎさなる。これを最北地點として明後日から南の方へ回り歸るのである。併し地球上に描く太陽の行路は螺旋狀であるから正確に云へば本年の太陽行路の最北端は臺灣ではなく太平洋の真中に當つて、臺灣の午前六時五十分といふ時である。それにしても一層精密に之を測定するならば北回歸線は毎年同一の所にあるのではない。今では少しづつ南の方へ寄つてゐるがそれは極めて僅かで四年経つても一分さば違はない。」云々

當臺北市では唯今始政三十年記念展覽會が催され極めて賑かです。晝は暑いですが夜は極めて冷しく蒸暑いやうな事はありません。南天の星座も美しく雄大な蝎座も中天高く這うてゐます。αセントウル星も地平線低く輝きます。常夏の國では夜も晝と別世界なのでせう。

六月二十二日
太陽の北回歸線標に達する一時間前
臺北市龍口町にて
山本先生侍史
岩崎良 三拜